

シュトゥットガルト美術アカデミーとバウハウス

青木 加苗（京都市立芸術大学）

1919年にヴァイマルに設立された包括的な造形芸術教育機関バウハウスは、直接的にはベルギーの建築家アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド（1863-1957）の大公立美術工芸学校や、更に遡る出発点にウィリアム・モリス（1834-1896）のアーツ・アンド・クラフツ運動などを、その前史として持つ。そして初期のバウハウスは、バウハウス宣言に象徴されるような工芸の復権と、ヴァシリー・カンディンスキー（1866-1944）やリオネル・ファイニンガー（1871-1956）による表現主義の影響をもって説明されることが通例となっている。それにもまして初期バウハウスにおいて重要であるのが、「予備課程」という全カリキュラムの基礎クラスを指導したヨハネス・イッテン（1888-1967）であろう。彼の教育が、バウハウスの基本的な造形理念の構築に多大な影響を与えたことは疑いもない。

このイッテンの色彩や構成についての造形理論は、シュトゥットガルト美術アカデミー時代の師であるアードルフ・ヘルツェル（1853-1934）に影響を受けたものである。1910年代のシュトゥットガルト美術アカデミーは、このヘルツェルの存在によって、他地域とは一線を画した先進的な美術教育機関の趣を見せていた。そしてこのアカデミーのヘルツェル門下には、イッテンとほぼ時を同じくしてオスカール・シュレンマー（1888-1943）が在籍していたのである。シュレンマーもまた1921年にバウハウスへ招聘され、当初壁画工房や彫刻工房での指導を行い、イッテンが1923年にバウハウスを去った頃からは主に舞台のクラスを率いた。1925年のデッサウへの移転後も1929年まで関わり続け、結果としてバウハウス14年間の内、足掛け9年間もマイスターとして在籍したことは、その影響力の強さを推し量るに難くない。彼ら2人以外にもイダ・ケルコビウス（1879-1970）が、ヘルツェルの元で学んだ後、バウハウスで更に学生としてカンディンスキーやクレー、イッテンから学んでいる。また反対に、同じくバウハウスのマイスターとなるパウル・クレー（1879-1940）を、シュレンマーがヘルツェルの後任として推薦し、そのためにクレーの展覧会を学内で行うという動きまであり、数多くのアカデミー教授に埋もれないヘルツェルの存在を裏付けているとも言える。これらのことは、バウハウスへの影響としてシュトゥットガルト美術アカデミーとの密接な関係を、少なくともアードルフ・ヘルツェルを、一考する十分な理由となるだろう。

本発表では、ヘルツェルとアカデミー時代のイッテン、シュレンマーを含む学生作品を精査し、バウハウスへと繋がる要素を拾い上げる作業を行う。そこには直接的にイッテンを通じて取り込まれた画面や色彩の「構成」という概念のみならず、シュレンマーの芸術理念に顕著に見られ、そしてバウハウス全体に通底する人間というモチーフへの視点も読み取れるのである。このヘルツェルとその教育について見直しは、設立から90年以上を経たバウハウスに今求められる、歴史的再検討の一つともなるはずである。